

**3月2日** なかよしコアラ 春のわくわくパーティ **子育て支援部**

ステージにはスタッフの皆さんが前日から「ひなまつり」の飾り付けを準備し、桃の節句らしさいっぱいので参加した親子29名をお迎えしました。始めに、おやま保育園の先生方と画用紙や花紙を使って桜の木をつくりました。次に、おおつか保育園の園児たちが、力強い銭太鼓と元気いっぱいの歌を披露してくれました。そして、わたりはし保育園の先生方によるリトミックで、参加した親子はとても楽しそうにリズム遊びをしました。最後に、スタッフ手作りおやつ「春のパフェ」をみなさんで美味しくいただきました。



**3月8日** 防災スタンプラリー **四絡災害対策委員会**

防災を楽しく学ぶ「防災スタンプラリー」を四絡災害対策委員会(山代裕始委員長)といずもTogetherが主催で四絡コミセンを会場に開催しました。メイン会場のホールでは、地震で起こる液状化現象やブロックの倒壊実験をしたり、子どもたちがテントや段ボールベッド、簡易トイレを組み立て、実際に座ってみたり寝てみたりして感触を確かめていました。また、被災地の写真や映像を見て災害について学びました。クイズやすごろく、そしてかるたなど避難時にどうすればいいのか?という課題について楽しみながら学べるコーナーを館内の各所に設置して、スタンプラリーで廻れるようにしました。そして各コーナーを廻ってスタンプカードを完成させた子どもたちには、「キッズ防災リーダー証」と缶バッジを贈呈しました。いざという時に思い出し、行動できるようにしてもらいたいです。



ふれあいサロン活動のようす **社会福祉協議会**

**3月2日** 音楽鑑賞と茶話会 **小山サロン会**



**3月3日** 健康体操 **姫原ミニサロン会**



**3月10日** 軽運動と脳トレ **大塚サロン会**



**3月11日** 歯の健康講座 **矢野サロン会**



**3月29日** 春の音楽鑑賞会 **よつがね全体サロン会**



**3月23日** サロンスタッフ全体会・研修会



**3月11日** 多文化共生講演会 **社会福祉協議会**

1995年の阪神淡路大震災をきっかけに生まれた「多文化共生」という言葉が持つ「支援する側・される側という関係を超え、共に配慮し合える社会をめざす」という強いメッセージは、30年経った今、薄れつつあります。真の多文化共生とは、イベント的な交流や一方的な「支援」に留まらず、言語や文化、国籍といった枠組みを超え、多様な個人が安心して暮らせる「居場所」を日常の中に築き、誰もが頼れる選択肢(依存先)を増やせるように社会の仕組み自体を変えていく、終わりのなき「営み」そのものです。



1. 活動の原点と「多文化共生」という言葉の誕生

講師は島根県外国人地域サポーターや住職として活躍される堀西雅亮さん。その原点は1995年の神戸での日本語学校教師時。阪神淡路大震災時にボランティアで設立された「外国人地震情報センター」が、後に「多文化共生センター」へ発展。「支援する・される関係を超え、共に配慮し合う社会」を目指すという強いメッセージを込めて「多文化共生」という言葉を広めたが、30年経った今、その意味が薄れているのではないかと問いかける。

2. 出雲市の現状と「多様な私たち」という視点

出雲市の外国籍人口は過去最多の5,345人に達し、ブラジル出身者を中心に46の国と地域の人々が暮らす。国籍、言語、育った場所など、一人ひとりが複雑な背景を持つ「多様な私たち」であり、その人々が生きる社会が「多文化社会」である。



3. 「支援」から「社会づくり」への転換:宍道高校と居場所づくりの実践

真の共生は、既存の社会システムに人を適応させる「支援」ではなく、社会の仕組み自体を変える「社会づくり」であると。

4. 相互的な学びと関係性の変化

講師が運営する「多文化クラス虹」は、日本語教育だけでなく、参加者同士が互いの言語や文化を学び合う場へと変化した。また、ポルトガル語母語教室に日本人の子どもが「友達だから」という理由で参加した事例は、大人の作った線引きを超え、「教える側・される側」という固定的な関係性を越えた真の共生の姿を示している。

5. 「自立とは依存先を増やすこと」:共生社会の目指す姿

熊谷伸一郎氏の「自立とは依存先を増やすこと」という言葉は、共生を考える上で核心的です。最終的には、ブラジルのように「多文化共生」という言葉が不要になるほど、多様性が当たり前の社会になることが理想である。